巻頭言

モデルと現実と：大学院の役割

神奈川大学大学院経営学研究科委員長
松　浦　春　樹

神奈川大学大学院経営学研究科発行の『研究年報』は本号をもって、第８号を迎えた。経営学研究科設置早々の時期に柳田仁教授の積極的な骨折りで誕生し、後藤伸教授によって紙面がさらに格調高いものに刷新され、今日に至っている。この事業は、本年度の経営学研究科予算の1/4強を占めており、この事実がこの事業の重要さを示している。経営学研究科に在籍している皆さんの積極的な活用を大いに期待している。

それではどのような内容を投稿すれば良いのだろうか。言い換えれば、大学院では何を学べば良いのであろうか。筆者は大学院で主として生産の計画と管理を学んだものであるが、その習いからの表現を許していただくならば、既存のモデルを学び、さらには現実から新たなモデルを作成するのが大学院であると考えている[1)]。

本研究科OBである稲垣氏は、モデルの役割とモデルの条件を、「「理論と実践」は、良く「地図と地形」に例えられて理解されます。地図が正しくて地形が間違っているという議論はありません。一方、見知らぬ地で目的地を目指すには、地図は欠かせません。」[2)] と述べている。ここでの地図がモデル、また、地形が現実に相当している。難しいことではあるが、実務（地形）に役立つ地図（モデル）を作り出すのが大学院であり、そのための習作の発表機会が、『研究年報』でもある。

三十代の筆者にとって衝撃だったのは、当時トヨタ自動車の生産管理部長木村修氏の短い文章であった[3)]。木村氏は、モデル（地図）に合わせて現実（地形）を改造してゆくのがトヨタ生産方式だと強く示唆していた。地形に合わせて地図を作成し終わったら、次の段階は、あるべき「地図」を思い描き、そのとおりに「地形」を改革してゆくことが大切であるということである。そのような論文を目指して頑張って下さい。

末筆ではあるが、本号の編集・発行に当たって貴重な時間を割かれた後藤伸教授、平塚事務局大学院担当関野弘之氏、西原聖織氏、博士後期課程湯川恵子君を始め、紙幅の関係上お名前は挙げないが関係の各位に厚く御礼申し上げたい。

参考文献

1）松浦春樹：「実務とその体系化」、学問への誘い2004年度版、pp.104-111、神奈川大学広報委員会、2003年12月
2）稲垣三郎：「次代を作る生涯学習」、図書館だより、p.６、No.105、神奈川大学図書館、2002年7月
3）木村修：「古典的ORからの脱皮」、オペレーションズ・リサーチ、pp.234-235、Vol.30、No.４、1985年４月